

大久保 街亜 (2013).
心理統計における新展開：帰無仮説検定の先を見る。
YPS2013 特別講演, 日光ホテル・ファミテック.

大久保 街亜

YPSとは、Young Perceptionist Symposium の頭文字を取ったもので、若手の知覚心理学者が、データを発表し忌憚なく議論を行うために設立された合宿形式の研究会である。合宿形式だからこそ、膝を交えながら夜通し語りあうことも出来る。1972年の初回開催からすでに40年以上も続いており、数多くの開催実績がある、伝統のある若手研究会である。

今回は、心理科学研究センターのプロジェクト「融合的心理学の創成：心の連続性を探る」における成果である書籍「伝えるための心理統計：効果量・信頼区間・検定力」についてYPS2013の主催者が、ありがたいことに興味を持ってくださり、特別講演の依頼を受けることとなった。

YPS2013が開催されたのは、日光のホテル・ファミテックであった。このホテルは学生の合宿宿として名が知られている。お世辞にもきれいとは言えない。しかし、価格が良心的である。主催者の話によると、YPSでは参加費が安いほど参加者が多くなる傾向があるらしい。そこで、このホテルが選ばれたとのことであった。参加者は30名ほどであったが、そのうち80%が大学院生であろうとおもわれた。おそらく、特別講演を引き受けた私が参加者の最年長だったであろう。このような年齢構成を考えると、なるほど、参加費がものを言うのも道理であると思われた。

特別講演の依頼を受けた当初は、Young Perceptionistの皆さんにどのような話をするべきか頭を悩ませた。主催者ともいろいろ打ち合わせを行い、参加者の興味を持つことをトピックにすることとした。Young Perceptionistは、皆、研究者である。研究者であるなら、自分の研究成果を世に知らしめたいものだろう。心理学の場合、それは論文として公刊することである。しかも、多くの人々の目にふれさせたいのならば、英語論文として公刊することが望ましい。そこで前述の書籍の中から、主に論文の執筆に関わることを中心に取り上げるとともに、その書籍の刊行以後に生じた新たな流れもふまえて講演を行うこととした。具体的には、アメリカの実験心理学の学会であるPsychonomic Societyが2012年の11月に発表した統計分析のガイドラインと対応させながら、論文を執筆するために必要な新しい統計解析の流れについて解説した。

90分という長大な講演時間をいただいたこともあり、このような流れが出てきた背景や統計解析そのものの理論、そして論文における具体的な執筆例など、幅広くかつ詳細に新しい統計解析の流れについて、Young Perceptionistの皆さんに紹介することができた。

講演のあとも積極的な質問があった。参加者自身の実体験にまつわる質問も多かった。博士論文の執筆や投稿論文の執筆や審査において生じた疑問や問題を率直にたずねてくれたため、かなり具体的な内容を伴った質疑応答となった。

心理科学研究センターのプロジェクト「融合的心理学の創成：心の連続性を探る」における成果である書籍「伝えるための心理統計：効果量・信頼区間・検定力」の内容をこのような場で、若い研究者の皆さんに直接伝えることが出来たのは貴重な機会であった。成果が単に公表されるだけでなく、その内容を研究者に直接伝えることができ、有機的なインターアクションを行うことができた。